

## 【本邦初訳】 韓国古典小説『李春風伝』

### — 堪忍袋の緒が切れた朝鮮時代の妻の反撃 —

西 岡 健 治\*

#### 1. 作品解説

「李春風伝」は、作者および制作年代未詳のハングルで書かれた韓国古典小説である。筆写本のみ伝わり、国立図書館本・伽藍文庫本・金起東所蔵本の三種類がある。内容的にはほとんど同一であるが、部分的に表現に違いがみられる。

日本では、1985年に朝鮮文学試訳として、宇野秀弥による翻訳が私家版として刊行されている。翻訳テキストとしては金起東編『李朝諧謔小説選』（1975年、ソウル・正音社）収録本文によったとあるが、その原本は国立図書館本・カラム文庫本とも異なるので前記三種類中の金起東所蔵本と考えられる。この度の翻訳は、これとは異なるソウル大学所蔵「伽藍文庫本」をもとに行った。そのため、宇野秀弥訳には見られない、大団円で妻が夫に「この、大馬鹿野郎！」と言いのしるせりふなどが出てくる。

あらすじは、およそ次のようである。根っからの遊び人である李春風は賭博と女遊びで親から譲られた財産を使い尽くしてしまう。こうなると家に帰るしかなく妻にも申し訳なく思

うが、妻の必死の手内職によって衣食が足りるようになると、平壤に行き、前のことは忘れて性懲りもなく妓生遊びに溺れてしまう。おまけに、商売をすると持っていったお金の中には、役所から借りたものも入っていた。そして、また前のように一文無しの乞食同然の身となる。これを伝え聞いた妻は、武官に扮して平壤に行き、さんざん夫を懲らしめるとともに妓生から金を取り戻すという話。男装して武官となった妻が、乞食にまで落ちぶれた夫を次々と懲らしめて行くところが圧巻である。

韓国古典小説の分類でいえば、李春風が両班（貴族層）の子弟と考えられることを根拠にすれば、諧謔が攻撃性を持つので〈風刺小説〉と考えられる。その中でも、『裴裨将伝』『烏有蘭伝』『鍾玉伝』などに属する「好色風刺小説」だといえよう。また、先に制作年代未詳と記したが、平凡な女性を主人公にしている点や、金銭問題が大きく扱われていることなどからすれば、張徳順の言うように「李朝時代小説の最も最後の作品」である可能性が高いといえよう。

---

\* 福岡県立大学人間社会学部一般教育教授

## 2. 凡例

一、原典は、金起東編『(筆写本) 古典小説全集』第六巻所収の「李春風伝」である。翻訳に際しては、この筆写本を活字化し注を施した申海鎮教授の『訳注 朝鮮後期世態小説選』所収のものを主に参考にした。他に、「李春風伝」異本の現代語訳二種、張徳順「李春風伝」(새글社『韓国古典小説選』所収、1972年)と金起東「李春風伝」(正音社『李朝諧謔小説選』所収、1975年)を参考にした。

二、金起東編『(筆写本) 古典小説全集』第六巻所収「李春風伝」には、段落や句読点や、会話部分につけた「」や、漢詩句などにつけた◇などはないが、読者の便宜を考慮して訳者がつけた。

三、翻訳においては、原文の味わいを残すため漢字熟語などは残すように努め、漢字にかなを振ってわかりやすいようにした。

四、朝鮮国内が小説の舞台であるので、人名や地名などの固有名詞には朝鮮語音をカタカナで付すようにした。また、普通名詞の場合、朝鮮語音を生かすため意味を漢字で表わし、それに朝鮮語音のルビをカタカナで付したところもある。

五、前記訳注者の申海鎮教授に多くの教えを乞うたが、それでも不明な部分は注において原文を表記したり不明と記しておいた。

## 『李春風伝』(ソウル大所蔵 伽藍文庫本)

スケチョン  
肅宗大王<sup>1</sup>が即位された後、聖徳をもって民を治められたので、国は泰平にして民は安らかであった。生活には何の不足もなく、人々は満ち足り、雨風はほどよく降り、毎年歳和歳豊かな

ので、康衢<sup>まち</sup>には童謡がかまびすしく、老人、擊壤歌<sup>あちらこちら</sup><sup>2</sup>を処々にて歌えば、これぞまさしく堯の日月にして、舜の治世である。

ときに、都<sup>ソウル</sup>のタラ<sup>ソウル</sup>町<sup>コル</sup>に一人の男が住んでいた。姓を李<sup>イ</sup>といい、名を春風<sup>チュンフン</sup>といった。家が長安<sup>みやこ</sup>の巨富であったので、少年のときより放蕩三昧。やることなすこと、すべて酒に女遊びであった。それに春風は親類縁者がなかったので、両親の死後は彼をとがめ立てする者は誰一人いなかった。それで、水のように用錢<sup>じゃぶじゃぶ</sup>如水と、先祖から譲り受けた数万兩を思いのままに使い、長安の春風花柳時、九月の丹楓黄菊時、花朝月夕に毎日酒肆青樓<sup>あさきゆうべ</sup>に通って濁酒を飲み、絶代佳人<sup>ぜっせいのびじょ</sup>をはべらせ、清歌妙舞<sup>うたやおどり</sup>に明け暮れるのであった。そういうときは近隣の遊び友達を誘って、酔い痴れるまで飲み遊んだ。そして、青樓<sup>ゆうかく</sup>の美色を妾<sup>びじん</sup>にして、よき歌やうま酒を飲み、味付け焼き肉<sup>ノヒア</sup>、煮込みカルビなどをたらふく食べ、来る日も来る日も飲んで騒ぎ、鴛鴦<sup>えんおう</sup>衾枕<sup>ふすま</sup>に戯れて遊びの限りを尽くし、一日に百兩もの大金を小錢のように使っていた。そればかりか、博打にも手を出してしばしば三四百兩を失っていたので、いつまでもこんな状態が続くはずがなかった。

たちまちにして錢<sup>かね</sup>を使い果たし、枯草のように干からびてしまうと、かねと一緒に遊んでいた輩<sup>やから</sup>たちの足もぼつたりと絶えてしまった。青樓房<sup>なじみのキーセン</sup>を訪ねて行っても、けんもほろろの応対であった。行く当てもなく、春風は家に帰るが、家の窮状はそれはひどいものであった。春風の妻、春風に詰め寄って、

「もし、どうか私の言うことをお聞きください。男子なら、この世に生れ文武両道に励んで、春塘台<sup>チュンタンデ</sup><sup>3</sup>にて聖君の面前で科举試験を受け、立身揚名して名を後世に残すのが願わ

しきことと言えましょう。さもなければ、先祖より譲り受けた財産を守って子孫に伝え、夫婦とも白髪となるまで仲良く暮らすなら、どんなにいいことでしょう。あなたは富貴も功名もいやだと言われますが、だからと言って、どうして父母から譲り受けた財産を一朝にして使い果たし、あれほど多くあった奴婢や田畑をだれに売り飛ばしたのですか。妻子を顧みることもなく、嗜酒貪色、鬪牋を好み、昼夜をおかずに放蕩三昧して、いったいどうなさるおつもりですか？ あなたには父母兄弟はありませんので、ごごとをいう者もないでしょうが、助けてくれる者もありません。どうか、どうか、おやめ下さい。美色ぐるいを、どうかおやめ下さい。

昔から、女狂いをして家をつぶさぬ例はありません。しばし私の言うことに、お耳をお貸し下さい。ミナリ洞の朴花真は、青楼の美色に狂い、しまいには飢えて死んだと申します。南山のふもとの李牌頭は、若くして富者となり大いに酒と女遊びをしました。終いには乞食となりました。モシジョン洞の金富者は、麴の商売がうまくいき酒屋を東奔西走して大いに稼いだのに、酒で数万両すべてを使い果たし、そのあとは糞尿を汲んだと聞きました。こういうことですので、どうか、青楼狂いはおやめ下さいませ。」と、切に頼むのであった。これに対して春風は、「そなた、予の言うことも聞くがよい。いま聞いたことは事実だとしても、前の家のメガルセは、酒一滴も飲まないのに錢一分も貯まらず、ペウ峠の李ドミョンは五十になるまで酒も色も知らないが、いまもあい変わらず住み込み暮らしである。また、タッ洞に住むモットリは、生まれて今日まで鬪牋雑技した

ことがないのに数千金をなくし、のちに飢えて死んだというが、これからしても、酒色・雑技をしないからといって、富者になれるというわけではないのだ。

もう少し、予の言うことを聞くがよい。かの酒豪の李太白<sup>5</sup>は、鷗鷺酌から鸚鵡杯<sup>6</sup>について毎日大酒を飲んでも翰林学士となり、鬪錢一手であった元斗杓<sup>7</sup>は、放蕩に明け暮れ若くして汚名をこうむったが、のちに発奮して政丞になったという。これらからしても、雑技や酒色を好むは男子の甲斐性であることがわかるであろう。予も、いま遊んではおるが、将来、きっと政丞となって後世に名を残すであろう。」

と言って、妻の言うことには少しも耳を貸さず、態度が気に入らないと云ってなぐったり、錢穀をしばしば持ち出すのであった。こんな性悪がどこにしようか。こうしているうちに、家の状態はまったくにっちもさっちも行かなくなった。

ここに到って、ようやく春風は、

「人並みなことができないのも、わが業であろう。予は、今ようやく心から自分のしたことを後悔している。許してくれ。」

と言って妻に謝り、そして、

「怒らずに聞いてくれ。いまわが心は自分を責め、漢語で言えば『今の是にして昨の非を覚る（覚今是而昨非）』というところだ。過ぎたことはさておき、今の貧乏はなんとかならんかのう。これじゃ、生きていく心地がせん。そこでじゃ、今日より、家中百事をそなたに任すゆえ、思いのままにやりくりして、衣食に困らないようにやってくれぬか。」というのであった。春風の妻、これを聞き、

「先祖より譲りうけた数万金を、あなたが

すべて青楼<sup>う</sup>に貢ぎ込んで、いまや一文無しになったのですから、それはできません。それに、任すとおっしゃっても<sup>かね</sup>銭がないのはもとより承知のはず。」

と云ってのける。春風、しばし考えて、

「そなた、わしの言うことが信じられないのか。ならば、今後ぜったいに<sup>さけにおんな ぼくち</sup>酒色・雑技をしないと誓約書を書こう。」

と言って、紙と筆を引き寄せ、誓約書を書き始める――

イムジャ<sup>あて</sup>【壬子四月十七日、金氏前ノ誓約書ナリ。  
右、誓約書ノ事端ハ、金氏之言ヲ聴カズシテ、祖業ノ数万金ヲ青楼中ニ蕩尽シ、今是<sup>いまのげに</sup>してさくのひなる<sup>さと</sup> 而<sup>ほぞをかまん も およぼざる</sup>昨<sup>きょうよりのち</sup>非ヲ覚レドモ、後悔、篋<sup>かじいっさい</sup>臍<sup>い</sup>而莫及ニツキ、自此日後、家中之事、金氏ニ一任スナリ。金氏治産之後、タトエ千金之財をナストモ、ソハスベテ金氏ノ財物ナリ。家夫デア<sup>も の いえのあるじ</sup>ル李春風ハ、タトエ一分銭、一斗穀タリトモ、不復<sup>ふたたびじゆうにつかういしはなし</sup>处理之意。如是ク誓約スルユエ、日後、若有豪酒、放蕩之弊アラバ、此ノ誓約書ヲ持チテ、官<sup>おかみにうったえる</sup>下政事モ可ナリ。  
家<sup>か</sup>夫<sup>ちよう</sup>李<sup>しよめい</sup>春風、右、自筆奏議ス】

と、自筆で署名までしたが、春風の妻は、

「誓約書がなんの役に立ちましょう。『此ノ誓約書ヲ持チテ、官<sup>おかみにうったえる</sup>下政事モ可ナリ』とありますが、妻のわたしに家長<sup>あなたさま</sup>を官に訴えることができませんか。』

と言って納得しないのであった。春風、これを聞き、

【右ノ文ヲ、金氏、不信<sup>しんぜざるゆえ</sup>之故、日後、モシ<sup>ごじつ</sup>異<sup>やくそくにたがえしこと</sup>端<sup>いぬちくしょう</sup>之弊アラバ、李春風ハ鄙夫之子ナリ。】

とまで書き足した。春風の妻は、笑いながらこれを受け取って函籠の中にしまい込む。そして、この日より<sup>しごと</sup>治産に励み、針仕事でも機織りでも何でもせつせとこなした。

五分<sup>せん</sup>もらって足袋<sup>ボソソ</sup>を仕立て、一ドン<sup>じゅっせん</sup>もらって足袋<sup>ボソソ</sup>を編み、二ドン<sup>にじゅっせん</sup>もらって襦袢<sup>じゅばん</sup>を仕立て、三ドン<sup>さんじゅっせん</sup>もらって古着<sup>よんじゅっせん</sup>を直し、四ドン<sup>はおり</sup>もらって<sup>ごじゅっせん</sup> 皷衣<sup>れいふく</sup>を仕立て、五ドン<sup>ろく</sup>もらって道袍<sup>ななじゅっせん</sup>を作り、六ドン<sup>ふとんにまくら</sup>もらって天翼<sup>ふかんのいふく</sup>を直し、七ドンもらって衾<sup>あわせ</sup>枕<sup>あわせ</sup>を作り、一両もらって尻部分<sup>ふかんのいふく</sup>を刺し縫いし、一両半もらって天翼<sup>ふかんのいふく</sup>を仕立て、二両もらって袷<sup>あわせ</sup>の刺し縫い、三両もらって官服<sup>はる</sup>を仕立て、春季<sup>はる</sup>には麻布<sup>なつ</sup>を紡ぎ、夏季<sup>からむし</sup>には苧麻<sup>あき</sup>の刺し縫い、秋季<sup>ふゆ</sup>には色染<sup>もめん</sup>め、冬季<sup>いちねんじゅう</sup>には木綿布<sup>い</sup>を紡いだのであった。あれやこれやと、春夏秋冬、昼も夜も休まず働き通したので、四、五年のうちに着るもの、食べるものも豊かになり、家もしだいに金持ちとなった。

春風は、妻のおかげで衣冠<sup>おもしろいもの</sup>も整うようになり、膏粱<sup>おいしいもの</sup>珍味もたらふく食べられるようになった。そうして、自家製の酒を飲んで毎日酔い痴れ、唾の飛ばしくらべなどに興じていたが、金持ちになると心がおごるもの、またもや以前の放蕩生活がなつかしくなった。

ある日、衣冠を整えて出かけ、戸曹<sup>おかみ</sup><sup>8</sup>から二千両を高利で借り受ける。そして、博物商売<sup>ようずあきない</sup>をするため平壤<sup>ピョンヤン</sup><sup>9</sup>へ行くと告げた。これを聞いた春風の妻がだまっているはずがない――

「どうか私の言うことをお聞きください。貴方<sup>はたち</sup>さまは二十歳<sup>はたち</sup>まえに先祖の残した数万両すべてを青楼に使いはたし、この五、六年は自重なされて外出なされなかったもので、世の中の変化もご存じないはずです。聞くところによりますと、平壤は実に繁華<sup>にぎやか</sup>な街で豪勢な暮らしをする者も多く、うす絹を張った窓辺

にたたずむ<sup>ゆうかくのびじょ</sup>青楼美色が、丹唇皓齒<sup>きれいなくちもと</sup>に笑みを浮かべて清歌一曲<sup>うつくしきうた</sup>を歌い、美酒もてあやしく勧め、金のありそうな者は身ぐるみ剥ぐと申します。平壤の世情、このようですので、どうか、どうか商売に行くのはお止めくださいませ。」

と、心より懇願したが、春風は、

「予もやはり男であるので、二十歳までに散財したことは痛恨の限りである。だから、平壤に行って取り返そうと言うのじゃ。〈千金散尽還復来〉<sup>たいきんさんずればまたかえりなん</sup>と古書<sup>10</sup>にもあるので、心配せずともよい。さっと行ってすぐ帰るので、ほかのことは決して心配するな。」

というのであったが、春風の妻は気が気ではなく、

「どうか、もう少し私の話をお聞きください。以前、身代を使いをはたしてすっからかんになれましたとき、一銭のかね、一斗<sup>いっこく</sup>の粟にも手は出さぬと誓約書を書かれ、もし約束を破ったならそれは〈鄙夫之子ナリ〉<sup>いぬちくしょう</sup>と、誓約書まで書いたのをはやお忘れか。生活のことは心配なさらず、どうか、どうか行かないでくださいませ。」

と、必死に頼んだが、春風は〈鄙夫之子ナリ〉<sup>いぬちくしょう</sup>といわれたことに怒りをあらわにし、妻の髪をわしづかみにして、殴りつけ、

「千里の遠きに遠征し、男子が一旗あげようというときに、女だてらがぐちゃぐちゃ何<sup>ていしゆ</sup>をぬかすか。」

と、ところかまわず殴るのであった。こんな悪党がいったいどこにしようか。妻に暴行を働き、家にあった品物を金に換えた五百両を加えて、いそぎ旅立って行った。人々は春風の妻が可哀そうでならなかったが、誰にもどうしようもなかった。

この日、春風は、錢二千五百両を馬に積んで即日出発したが、虎の皮を敷いた駿馬に堂々とまたがり、走馬加鞭<sup>ひとむちくれれば</sup>、たちまちに速度を増し、意気揚揚と先を急いだのであった。延韶門<sup>ヨンソムン</sup><sup>11</sup>を通り過ぎ、舞鶴峴<sup>ムハクとうげ</sup>を急いで過ぎ、一路平壤へ向かう。途中、青石洞を通り過ぎるとき、左右の山河を見わたすと、ときあたかも春たけなわである。溪谷ごとに、瀑布声<sup>たきのおと</sup>は左右に響き、楊柳<sup>ようりゅう</sup>は青山をめぐらし、黄鳥白鳥<sup>とりどり</sup>は自由気ままに飛び回っている。

あらゆる草木は盛んに茂り、開闢時天皇氏は五行の初め木徳<sup>12</sup>にて、日月の初めて照らす東方扶桑の木<sup>13</sup>、農作業に精を出し奇怪な葉をつける陽木<sup>14</sup>、荒城に〈虚しく照らす碧山の月蒼梧雲中に跨る〉<sup>しずむゆうひ</sup><sup>15</sup>古木、周遊落日に人を恋しがる相思木<sup>おもうのき</sup>、日長くして〈草堂春睡〉を覆う<sup>そうどうのねむり</sup>柘植の木<sup>16</sup>、〈白兔搗葉秋復春〉<sup>うさぎくすりをつくあきにはる</sup><sup>17</sup>の〈月中丹桂〉<sup>げつちゅうたんけい</sup><sup>18</sup>月桂樹の木、紫檀に白檀<sup>みかん</sup>、柑子に柚子<sup>ゆず</sup>の木、低く横に張った盤松<sup>まつ</sup>、幾重にも垂れた山葡萄やサル梨のつる、曲がってたわんだ大松<sup>おおまつ</sup>、垂れ下った楊柳は春風と戯れながら踊っている。春を楽しむ鳩は飛び交って春を満喫し、楊柳の鸚鵡<sup>やなぎ</sup>は今を盛りとさえずり、舞う蝶や飛ぶ鳥も春の光をいっぱいにあびている。

こうした景色をたっぷり見たのち、臨津江<sup>イムジンガン</sup>を渡り、走馬加鞭<sup>うまにむちくれ</sup>で洞仙嶺<sup>19</sup>をいそぎ過ぎ、黄州兵營を見物して、平壤を遠くに見ながらヨンゲ村をいそぎ過ぎ、長い林を抜けてようやく大洞江<sup>テドンガン</sup><sup>20</sup>に到着すると、牡丹峰<sup>モランボン</sup><sup>21</sup>があってその下に浮碧楼<sup>フビョンヌ</sup>が見え、大同門<sup>テドンムン</sup><sup>22</sup>、練光亭<sup>ヨングワンジョン</sup>がある。まさに、天下第一の名勝とはこのことである。箕子・檀君二千年の歴史をもつ平壤、普通門<sup>タングン</sup><sup>23</sup>はその遺跡である。また、城府もすばらしいが、永明寺<sup>おてら</sup><sup>24</sup>も趣がある。水口門<sup>ひかり</sup><sup>25</sup>外の帆船には、初夏の日光がまぶしく当たっている。大同江

をいそいで渡り、大同門より城内にはいると、人々はせわしげに行き交い、建物のようにすも実に華麗である。この地が小江南<sup>26</sup>といわれるのも、もっともである。

春風チュンブンの様子をご覧あれ<sup>27</sup>。布政楼<sup>28</sup>ボ ジョン ヌの前を通り過ぎ、あたりの山川けしきを見物し、青楼ゆうかくの前もさっと通り過ぎる。客舎きやくしゃに泊ることにして、12箱にわけて運んできた錢を一つずつ積み下し、三四日宿泊して平壤の街のようすを伺うことにした。

ある日、窓辺てすりの欄干にもたれて隣の家に目を見ると、家の造りもなかなかである。はたして、主人はどんな人かと思っていると、意外や意外、平壤一の妓生と名高い秋月チュウオルであった。遠目にも見惚れるような美人であるばかりか、歳も花の二八<sup>29</sup>にはちの盛りである。それで、城中ピョンヤンの豪傑客や朝鮮八道の遊び人らが、ただの一度でも遊ぶことが出来れば千両は安いものと、押し寄せて来ていた。

このとき秋月は、都のソウルから富商大賈かねもちのがやってきたとのうわさをすでに耳にして、春風を誘惑しようと待っていた。紗窓レースのまどを半ば開き、ちらちら見せる艶姿、緑衣紅裳あですがた うつくしきものを着て高く坐った様を春風が目にしたが、その容貌その態度は、露を含んだ牡丹の花にも見まがうほどであった。妙なるその姿は、まるで水浴びせしツバメのようであり、緑衣紅裳あですがたを着た艶姿はまるで枕もとの屏風絵のようであった。美しい容貌は月宮かんばせ つぎのみやこの月桂樹のようであり、李花桃花すももやものはなのように人を魅了し、清い半月の光が天の川に浮かんでいるようであった。

青楼の上に一人座り、七絃の琴を取り出し、卓文君<sup>30</sup>の心を魅了した司馬相如の「鳳凰の曲」を、“チンテントン、チンタントン”とみごとに演奏した。これを目にした春風は、心乱れて

坐不安席きもそぞろ、たちまち秋月に心を奪われてしまった。こうなれば、またしても例の病気に火が付くのは当然である。もとより、この男は、青楼と聞けば火薬庫に爆弾かかえて飛び込むほどの男であってみれば、しばらく我慢してみたものの、どれほどの期間でもなかった。やたらと雑念が生じ、春風はまるで磁石の針がいつも北を指すように秋月を思っチュオルて胸焦がすのであった。

春風チュンブンの様子をご覧あれ。新しい服に着がえて秋月の家を訪問しようと、錦紗氈衣あやなるにしきにフェルトのきものを着て、まるで結婚式に出かけるかのように、春塘台<sup>31</sup>かきよしけんじょうに掛けられた試験の問題を見るように、黄鶯双々が楊柳きうぐいすのつがいもとめて飛んで行くように、蜂や蝶が花から花へと飛び行くように、雁がんが洞庭湖を目指して行くように、訪ねて行くのであった。

秋月の様子をご覧あれ。春風がやって来るのを戸のすきまから盗み見て、玉顔たまのかんばせきりっと上げて、庭に出て喜び出迎える。そして、纖々きゃしゃなたまなすて玉手もて春風の羅衫きぬのうわぎを手に取り、二人して欄干に上がり、左右を見わたすと、すばらしい家の造りである。広々とした大庁の前後には縁側が付いており、欄干が二段となっているのもこの家に似つかわしい。

室内へやに入って左右を見わたすと、山水屏風びやうぶに、雲霧屏風うんむがあり、葡萄や竹葉ちくようが描かれた水墨画が紗窓の上に掛けられている。壁に貼られた書を見ると、それは董仲舒<sup>32</sup>の「策文」であったり、諸葛亮<sup>33</sup>の「出師表」であったり、陶淵明の「歸去來辞」に、「赤壁賦」<sup>34</sup>、「襄陽歌」<sup>35</sup>の句であったりした。銅の燭台に銅の鏡、尿缸・唾具・灰皿、引出し付のタンス、倭鏡大鏡・幣帛鏡に、血枕・安枕ひすいのしとね<sup>36</sup>、翡翠衾は前後左右に置かれ、函籠、衣服櫃なごもちが適所に整頓されて置かれている。

秋月の様子をご覧あれ。愛想よく出迎えて、  
静かに坐りたる様は実に見事で、花の容貌に気  
品がある。八字青山に、海苔のように黒々とし  
た髪のおい香ばしく、羊毛の二重のスカート  
をはき、(不明)<sup>37</sup> 烏 銅 鉄 柄、玳瑁 装 刀  
を刺繍糸で結えつけ、服の紐の結び目には厄よ  
けの飾りを付け、耳にはリングの耳飾りを付  
け、純金の指環に、玉の指環が見目にも美しい。  
八両紬<sup>38</sup>の下着<sup>39</sup>を着け、藍鳳を刺繍した絹の  
スカートの端をつかんで腰に巻き、水禾紬の  
ボソンを、ほとけのて 足袋をはき、仏手<sup>40</sup>を飾り、花唐鞋を〈でる〉  
しゆつ「出」字のようにして履き、霞白<sup>41</sup>青山を開き、  
なまめかしきびじょ 丹脣皓齒の微笑むさまは、桃や李の花が春風に  
吹かれて野に咲きみだれ、蜂や蝶に逢ってよろ  
こんでいるようであった。織々玉手をさっとあ  
げ、「寿」「福」の字を彫刻した白銅のキセルに  
サムデュン とくせいたばこ 三登<sup>42</sup>産の 別 草を手際よく込め、青銅火炉の  
灰をかきわけ火をつけ、春風の前に差し出し  
た。そのとき、実にいい香りが辺りにただよっ  
た。春風はキセルを受け取って、

「予も京城に生まれ育った者なので、青樓  
のことはひととおり心得ておる。平壤に  
下ってきて、客 愁 寂 寞、〈可 憐 今 夜  
しょうかにしゆくす しょうかのそなた きやくをはずかしめるでない  
宿 娼 家〉<sup>43</sup>ので、倡家少婦は 不 羞 賓 ぞ。  
はなのいのちはみじかく 〈東園桃李片時春〉<sup>44</sup>て、ままならぬが浮世のな  
らい。かつて股賑を極めた漢の武帝の柏梁台<sup>45</sup>、  
魏の曹操の銅雀台に、今は笙篁も聞かれぬで  
はないか。」

と言うと、秋月はいずまいを正し、微笑んで、  
「はるばる京城からいらっしゃいましたと  
のこと、道中、無事泰平で何よりでございま  
した。どうか足をお止めになり、四五日こち  
らにお泊りになられますよう。それにして  
も、おいでが遅うございました。」  
と言う。そして、余計なことは言わずにさっと

立ち上がって、酒饌をすぐに用意して来た。そ  
れらを見ると、菊を彫刻した足つき膳に、玳瑁  
や羊の角で飾った大皿が載っており、その上に  
タコやアワビを盛り合わせ、ぼらの煮込みに、  
カルビの煮込み、焼き肉に、散炙に、野菜など  
をあしらい、酢や醤油やキムチ汁は別途に置  
き、銀杏、なつめ、美味そうな梨に、梧桐瓶や  
玳瑁瓶に入った甘紅露<sup>46</sup>、花草酒を、鷓鴣 杓  
で鸚鵡 杯にあふれるほど酌をすると、春風、  
いい気持ちになって、

「平壤は〈小江南<sup>47</sup>〉だと聞いておるので、  
コンジュ ガ 勸酒歌が聞きたいものじゃ。」

と言う。秋月、ほほえんで、清らかな声で歌い  
出す、

♪「さあ、お飲みください。どうぞ、お  
飲みください。妾のお注ぎします酒を、ど  
うぞお飲みください。百年生きるとも、人  
生は〈憂 楽 中 分 未 百 年〉<sup>48</sup>。とても  
千年は生きられぬ人生、遊ばずしてなんと  
する。これは酒ではなくて、漢の武帝が承  
露盤に受けた露ゆえ、どうぞお飲み下さい。  
逆 旅 乾 坤、楽しく生きねば何とする。ど  
うせこの世は一場春夢よ。さあさ、お飲みく  
ださい。どうぞ、お飲みください。お勧めす  
るとき、お飲みください。これは、不老長寿  
の薬草もて醸造りし酒ゆえ、苦かろうとも、  
全部きれいにお飲みください。」

と、声高らかに歌う。春風は、次々とお酌され、  
酒を飲んででは浮かれて遊ぶのであった。

そして、今度は、平壤の大同江で遊ぼうと、  
春風が秋月を連れてやって来る。月は明るく、

「春風、秋月の二人、夫婦となって遊びま  
しょうか。」

と、秋月が言うと、春風は秋月の「月」の字を  
韻にして、

が び さんはんりんのつき ちょうあんいつべんのつき  
 「峨眉山半輪月」<sup>49</sup>に「長安一片月」<sup>50</sup>、  
 けいめいざんあきのよのつき しやうすいのながれをへいほすつき  
 「鷄鳴山秋夜月」に「平鋪湘水流月」<sup>51</sup>、  
 ひとりえいもんによりてのぞむしゅうげつ ほくどうの や や  
 さらに「独倚営門望秋月」<sup>52</sup>に、「北堂夜々  
 ひとつきのごとし こうざんりょうのめいげつ  
 人如月」<sup>53</sup>に、「黄山陵名月」がある。「二月」、  
 「三月」、このときは全山月に照らされ荒涼  
 としているが、それにひきかえ金風には情が  
 ある。炉辺にて語り、日が暮れば、初更、  
 よる まよなか  
 二更、三更とわれは月と遊ぶ春風で、そなた  
 は秋月であるので、日月のように配匹となっ  
 て、春風・秋月<sup>54</sup>われらは、たとえ天地が減  
 んでも、風月<sup>55</sup>に変わりがあらうか。ああ、  
 よいかな、よいかな。」

と遊ぶのであった。秋月は、それに答えて、  
 だんなさま  
 「書房様が『月』の韻をお付けなされたの  
 わたし あなた  
 で、小妾は春風様の『風』の字を韻にしてみ  
 ましょう。〈澹水<sup>56</sup>の西北風〉、〈赤壁の東南  
 あきかぜをみる ばんこくへいぜんそうもくの  
 風〉<sup>57</sup>、〈洛陽城の見秋風〉<sup>58</sup>、〈万国兵前草 木  
 かぜ  
 風〉<sup>59</sup>、〈白ハクチェチュンイルリヤの風〉<sup>60</sup>、  
 ようりゅういとをたれ こうにみつ かぜ すいてき こうざん らくえんの  
 〈楊柳垂絲満江風〉<sup>61</sup>、〈吹笛江山楽園  
 かぜ はる に さんがつ よきかぜ  
 風〉<sup>62</sup>、〈春二三月の順風〉、〈冬至十二月の  
 かんふう もろもろのかぜ なごむかぜ  
 雪の寒風〉、〈諸風〉、〈和風〉<sup>63</sup>、これらは  
 さておき、紛壁紗窓の簾に〈今生一陣  
 ふじんのへやのまどべ いまいじんのかぜの  
 風〉<sup>64</sup>も、愛を誓って小妾は春風となり、  
 しょうずる わたし  
 あなた われら ふうふ  
 主は秋月となったのですから、春秋<sup>65</sup>が配匹  
 となったからには、大同江の水が涸れようと  
 しきのかぜ  
 も〈四時風〉に変わりがあらうでしょうか。あ  
 あ、よいかな、よいかな。

それにしても、清風名月の夜三更に、二人  
 えんおうのふすま  
 であい対して寝、鴛鴦衾枕に愛をかたること  
 と、どうしてなったのでしょうかね。」

と、応じるのであった。春風は、すっかり秋月  
 めかけ  
 に心奪われていたので、すでに妾を得て、酒宴  
 に興じているような気でいた。こうして、放蕩  
 な春風は商売にまったく関心をしめさず、この  
 日より、持って行った二千五百両を湯水のように

に使った。来る日も来る日も、酒を飲んで酔  
 いしれ、よい歌を聞いて日を暮らし、日夜遊び  
 にふけた。

このとき秋月は、あり金すべてせしめてやろ  
 うと、嬌態のかぎりをつくし、

「緋緞、繭紬、長紋紬<sup>66</sup>を買ってください  
 あおくじゃくししゅうせしきぬ つむぎ  
 な。藍鳳黄羅、八両紬<sup>67</sup>、短紋紬を買っ  
 ぎんのたけかざり ほうおうのかんざし  
 てくださいな。銀竹節、金鳳釵、買って  
 こうきゅうしよつきひとそろい  
 くださいな。飯床器、買ってくださ  
 いな。タコや干し肉、ナマコを肴にしたいので、  
 買ってくださいな。米が足りないので、延安、  
 トンネ ウルサン  
 白川の上々米を二十石ばかり、東萊、蔚山の  
 こうきゅうわかめ  
 大長藿<sup>68</sup>を十束ばかり、買ってくださいな。」

と、次々とねだったのであった。舞いあがって  
 しまった春風は、一度もことわることなく言わ  
 れるままに、五十両、百両と出してやった。だ  
 が、金には限りがあり、こんなことがいつま  
 でも続くはずがない。一年もたたないうちに、  
 二千五百両もの金をすべて使いはたしてしまっ  
 た。とんでもないこの男は、秋月に身も心も  
 奪われていたので、生活の心配など考えていな  
 かった。

狡猾な秋月は、金をすべて巻きあげ、もはや  
 用のなくなった春風を追い出しにかかった。そ  
 のとき、秋月はそれまで呼んでいた〈書房様〉  
 だんなさま  
 とは言わず、

「もし、そこの両班、城中場外の閑良なら、  
 金がなくなればさっさと帰るもんですが、両  
 班もお帰りですかね。路銀が足りないようなら、  
 少々用足ししてもようござんすよ。」

と言って、少し金をめぐんでやって追い出そう  
 とした。

春風のさまをご覧あれ。だまされたと知り激  
 怒したが、そこをぐとこらえ、

「初めてそなたに会ったとき、鴛鴦衾枕に  
 えんおうのふすま

二人寝て、願<sup>しん</sup>でもはなれまいぞと堅く誓い、大同江深き水の潤れようともして別れないと誓ったのに、あれは時のなりゆきか、あるいは戯れか。そなたは、本気で帰れと言ってるのじゃないだろうな。」

と言った。秋月、これを聞き、あきれるとともに痼癩<sup>こら</sup>を起し、

「これ、お前さん、そんなわけの分らないことは言うでないよ。まぬけだとは思っていたが、こんなわからず奴<sup>やつ</sup>だとは。」

と言って、はやく帰れとばかりに背中をどんと押し、縁側の下に春風を突き落とす。春風は、悔しくもあり自分が情けないので、大きくため息をついた。柱にもたれて、あれこれ考えれば考えるほど嘆きが増して来た。

「京城<sup>みやこ</sup>に帰ろうにも、どの面<sup>おもて</sup>さげて帰れようか。妻子にもあわす顔がなく、友人にも面目ない。おまけに、戸曹<sup>おかみ</sup>から借りた金をすべて使ったから、義禁府<sup>じゆうざいにんとりあつかいしょ</sup>に囚われて鞭うたれて死ぬはまちがいない。そうだとすれば、ソウル<sup>みやこ</sup>にも帰れない。ああ、なんとしたらよいものか。いったいこんな災難<sup>こ</sup>があるものだろうか。大同江の一番深いところに飛び込んで死んでしまいたい、それも出来ない。鋭い銀装刀<sup>あいくち</sup>でひと思いに首を突いて死にたいが、それも出来かねる。ああ、なんとしたらよいものか。平壤<sup>まちなか</sup>の城中の乞食となり、あちらこちらともらって歩けば、老いも若きも顔見合わせてぎょうてんし、誰もが笑うことであろう。ああ、これもだめだ。ああ、なんとしたらよいものか。まったく八方ふさがりだ。」

と、あれこれ思い悩むが、いい考えがさっぱり浮かばない。仕方なく、秋月に頼み込むことにする――

「おい、秋月、おれの言うことも聞いてくれ。そなたは、どうしてそんなに薄情なのか。そなたの家にいさせてくれれば、小間使いでも何でもするからそうさせてくれぬか。ぜひ頼む。」

と、哀れな声でいう。秋月の様子をご覧あれ。秋月、春風を横眼でにらみつけ、

「これ、お前さん、まだそんな物言いをしてるのかい。“おい、秋月”などと気安く呼んだり、“頼む、させてくれ”などと、よく言えたもんだ。私の家<sup>うち</sup>にいて、そんな口をきかれた日にゃ、どちらが使用人かわかりやしない。」

と、むかつ腹を立てる。春風は悔しかったが逆らうこともできず、“ご主人さま”と言い換え、“させてください”と言い換えたのであった。この日より春風は秋月の家<sup>うち</sup>にいることは許されたが、朝から晩まで奴隷のように働かされ、むしろ死んだほうがよかったと後悔するほどであった。

そうこうするうちに月日がたち、衣服は汚れてぼろぼろになり、乞食の中でも上々の乞食姿になった。食事時には、欠けた古どんぶりに、あたえられた残飯<sup>サバ</sup>と汁を入れ、土間<sup>スツカラ</sup>でさじも与えられずに食べさせられた。初めは泣けて食事ものをどを通らなかつた。そんなとき涙がどつとあふれて来て、自分の身を嘆き、世を呪ったりもした。

平壤<sup>あそびにん</sup>の閑良どもは、昼夜を問わず群れをなして秋月<sup>みせ</sup>の家<sup>うち</sup>にやって来た。そして、あらゆる遊びをして秋月と一緒に浮かれ騒いだ。美酒<sup>うまさけ</sup>を飲み、歌をうたって、どんちゃん騒ぎをした。

このときの春風のさまをご覧あれ。ひそかに庭に一人立って中<sup>うち</sup>のようすを伺うと、おのが心に浮かぶものは世にも珍しい大豊作<sup>おおごちそう</sup>であった

が、実際自分が食べている物は極凶作にすぎなかった。春風は、哀切な声を出して、おのが身を嘆くのであった——

「哀号、哀号、情けなや。これから先、どうしたらよいものか。もう生きていくのが嫌になった。わしも京城みやこに生まれ、二十前はたちには遊び人どもと青楼ゆうかくに通ったものだが、戸曹おかみの金二千両と家の金五百両を持ち出して平壤チュウオルに来て、主人と良い仲となり願生離しんではなれまいぞと誓ったのも束の間、この様となつてはもう生きていくのが嫌になった。今宵は冬十月の十五日だ。夕暮れ時、月明るい寒空を飛び行くかの雁キロギよ、わが胸のうちをどうか明天てんのかみさまに伝えてくれ——。」

と、長く声を伸ばして雁に訴え、

「緑楊みどりなすやなぎが千万山せんまんざんあろうとも、去り行く春は止められず。探花蜂蝶はなをもとめるはちやちょうだとて、散る花は止められず。いかに家が重要でおんなはおっとにしたがうべき〈女必従夫〉だとしても、去り行く者は止められぬ。しきりに故郷が思い出されるが、妻子は元気で暮らしているだろうか。今も待ってくれているだろうか。あれこれ考えると、胸はり裂け、五臓六腑が煮えくり返りそう。よせ、今さら言っても無駄なこと。すべて忘れて、好きな歌詞カサでも歌うとしよう。そうだ、梅花打令メファクリョウ<sup>69</sup>がいい。」

と言って、歌い始める。

このとき、秋月の部屋で遊んでいた閑良あそびにんどもがその歌を聞きつける。そして、驚いて顔を見合わせているので、秋月、面目丸つぶれとなる。それで、

「あの者は、ソウルから来たうちの小間使いですから、どうかお聞きながしを願います。」

と、その場を繕う。これを聞いた閑良どもは、

ソウルから来たというので同情して酒を一杯ついでやる。春風は、これを受け取り飲みほして感謝感激するのであったが、実に哀れな姿であった。

話変わって、この頃、春風の妻は夫と別れてのち夫のことが心配で、毎日昼となく夜となく暇さえあれば、

「商売がうまくいって、どうか早くお帰りになりますように。」

と、祈っていた。しかし、春風は帰って来なかった。うわさによれば、李春風なる者は平壤に商売に出かけたが、妓生秋月にひどい目にあわされ、行き場を失って上々の乞食となって、今は秋月の家で小間使いをしているという。春風の妻はこれを聞き、胸をたたき大こえをはりあげてなげい声痛哭した。

「ああ、なんということか。うちの人は、人並みに生まれてきながら、どうしてこんなに嘘つきなのか。青楼花房ゆうかくの女にかかって一度身を滅ぼすだけでも悔しいのに、彼方の異郷へそれも公銭こうせんを持ち出して、またもや身を滅ぼしたという。ああ、なんということか。いったい、どうしたらいいのだろう。それにしても、何の因果でこんなことになったのか。わたしは家長ていしゅにも恵まれず、一生苦勞する八字うんめい<sup>70</sup>のもとに生まれたのだろうか。ああ、なんということか。天が人に与えた八字は免れることはできない相談だけど、かといって一人で生きてもつまらない。いっそのこと、ナムサンナムサンに登って、明紬きぬおりの手ぬぐいの端を樹の枝に結わえつけ、首を吊って死んでしまおうか。さもなければ、南山ナムサンの白額虎おおとらにがぶりと食われて死んでしまおうか。ああ、どうしたらいいものか。」

といって嘆くのであった。そして、齒ぎしりし

ながら、

「そうだ、平壤に行き、<sup>ヒョンヤン</sup>秋月の家に駆け込<sup>チュウォル</sup>んで秋月の髪を両手でむんずとつかみ、ぼこぼこに殴ってやろう。家財道具も、みなぶつ壊してやろう。そのあとで、<sup>ていしゅ</sup>春風のところに行き、奴の首に縄をかけて首を吊って死んでやる。」

と、しばし大声でわめいていたが、ややあって気を取りもどして、

「わが家長を伴って<sup>おっと</sup>京城へ帰<sup>みやこ</sup>り、<sup>おかみ</sup>戸曹の金二千兩もすべてきれいに返し、衣食の憂いなく夫婦仲良く暮らして、百年同樂となることはできない相談だろうか。そうできれば良いのだが。」

と、思案するのであった。

ちょうどこの頃、隣家の金承旨<sup>スンジ</sup><sup>71</sup>宅ではすでに父は死んでいたが、長男が文章をよくするので若くして科挙に及第<sup>こうかく</sup>、翰林となって弘文館<sup>72</sup>勤務を経て都承旨<sup>73</sup>になっていた。去年は平壤監司<sup>74</sup>の第二候補であったので、今年はぜひ平壤監司になりたいと思っていろいろ画策していることを、春風の妻は小間使いから聞いていた。だが、承旨宅は廉潔であったので貧しかった。そのうえ、家族が多かった。なかに老夫人のいることを聞き、針仕事でもさせてもらいたいと頼みに行った。すると、奥深い所にある別堂に、都承旨の母堂が伏せておられた。なにせ貧乏であったので食事もちょうんと食べられず、着ているものはよれよれであった。これを目にした春風の妻の脳裏に、

「このお宅の力でもって家長を救い出し、秋月に仇討ちができるかも……。」

という思いがひらめいた。その日より、針仕事や草取りに精を出し、儲けた金をすべて承旨宅老夫人の食事に費やし、老夫人の口に合った食

べ物を特に選んで差し上げた。老夫人はたいへん喜び感謝して、日夜、

「このお礼は、どうして返したらよいでしょうね。」

と思案しておられたが、ある日、春風の妻を呼んで、

「聞くところによれば、そなたは、家の者が財産をすべて蕩尽したので針仕事などをして暮らしているというが、毎日、<sup>ごうかなしよくじ</sup>茶啖床を食べさせてくれて感謝しております。でも、こんなにしてもらっていいものかと、ときに不安になります。」

と、言われたのであった。春風の妻は、

「<sup>わたし</sup>小女だけでは食べきれませんので奥様にさしあげておりますのに、感謝されましてはかえって恐縮しております。」

と答えたのであった。これを聞いた老夫人はたいへん感心され、何やら長く考えておられた。

ある日、ご機嫌伺いに息子の都承旨が老夫人を訪ね、

「この頃、母上の<sup>おからだのぐあい</sup>気候がたいへんよろしいようで、実に和やかな顔をしていらっやいます。」

と言うと、老夫人は都承旨に、

「殊勝な人がいるもので、隣の李春風の奥<sup>ごうかなしよくじ</sup>さんが私のために毎日茶啖床<sup>75</sup>を差し入れてくれているおかげです。その心がけには、わたしも心から感謝しております。」

と告げた。都承旨はこれを聞き、春風の妻に厚く礼を言うとともに、家で見かけたらよく声をかけてくれた。

そうこうするうちに、<sup>おどろくなかれ</sup>千万意外、都承旨が平壤監司に任命された。春風の妻は、早速、老夫人のもとに挨拶に向き、

「<sup>スンジのだんなさま</sup>承旨大監が平壤監司になられたと聞きま

したが、こんな慶事めでたいことがまたとありましようか？」

と申し上げた。すると、老夫人は、

「わたしも平壤にお供するので、そなたも一緒に行って春風おっとを探してみてもはどうです。」

と、平壤行きを勧めた。しかし、春風の妻は、  
「小女わたしのことはさておきまして、わたしに兄ふかんがおります、この兄を裨将76としてぜひ召し抱えていただきたいのですが。」

と、頼み込んだのであった。老夫人、これを聞き、

「そなたの頼みを断ることなどできましようか。そうしてあげましよう。」

と願いを聞き入れた。息子の監司にその旨を伝えると、監司も承諾して、

「会計裨将を命ずる。」

ということになった。チョウルシグ、なんと嬉しいことではないか。でも、春風の妻は、兄もいないのにどうするつもりだろうか。実は、自分が男装して行くことにして、そう言ったのである。春風の妻は、女の着物を脱いで男の服に着替え、身なりを男らしく整えた。

上等マンゴンの網巾77に付いた貫子クワンジャに紐を通して額にきりっと結び、その上に定州産の宕巾79をかぶり、三百本の竹ひごで作った笠じゅずつなぎにしたさんごから珊瑚格子バジを両耳の横に威風堂々と垂らし、袴きやはんをはいて、筒行纏ボソを着け、丈夫な麻布で作った足袋かむつをはき、唐鞋に鉾チンジュを打って80見目よくはき、晋州産の克羅ぬのじの下着をつけ、生絹きぎぬで作った褌衣ふだんぎを着、礼堂細布のテウイテギ83を体に合わせて仕立てたものを着、その上に羊の皮の上着を着、紫色の鼈甲細工や将牌チャンペ84を結びつけ、上質な帯で胸元をぎゅっと締め、礼服用の防寒帽マンソンドリ、作業時の防寒頭巾フイヤンを、両耳かくしてかぶり、梧桐節瓶きりのさかつば、玳瑁べっこうかざりのの粧刀こがたなを腰の帯に結え

つけ、瀟湘斑竹しょうしょうの た け85で作った鎖金扇みごとなおうぎに飾り紐をつけ、それを長く垂らした汗衫つつそでの中に入れて持ち、あたりを悠然と歩く姿は、まさに凛々しき武人である。

承旨宅に出向いて、小間使に再び来ることを伝える。夕方、ご馳走をこしらえて老夫人に差し上げたのち、階下に正座して、

「春風の妻、ご機嫌伺いに上がりました。」と、申し上げる。夫人は、その姿を見てびっくりされる。部屋に呼び入れ、

「そなたが、どうして男装をしておるのじゃ。」

と、お聞きになる。裨将が、

「小女わたしの主人は無類の放蕩者で、一度ならず青楼キーセン美色遊びをして身を滅ぼしております。しかも、この度は、戸曹おかみのお金二千兩を高利で借り受けた金をもって平壤に行き、妓生キーセン秋月にすべて貢いでしまい、帰るに帰れなくなっているということでございます。小女わたしもこれ以上、もうがまできません。男装して平壤に行き、秋月をこらしめ、戸曹のお金も回収し、主人も連れ帰って、二人して百年同樂所存でございます。そういうわけですから、どうぞこのような姿をして出かけますことをお許しくださいます。」

と申し上げる。すると、老夫人は手を打ってよろこばれ、大笑いして、

「そういうことなら、思い切りやってみるがよい。」

と言ってくれる。ちょうどその時、監司が母堂おくのまに86にやって来られる。すると、見知らぬ男があわてて下に降りて、監司にあいさつをする。これを目にした監司は激怒して、

「そちは、恥ずかしくもなく何ゆえ大夫人

の内堂に居るのか。こやつをただちに引っ捕らえよ。」

と大喝されたのであった。老夫人は笑いながら、監司に、春風の妻のこれまでのいきさつを詳しく説明された。すると、監司も大笑いされて、堂上に春風の妻を呼んで近くに召され、見上げた者だと称賛された。そして、あたりの様子をうかがってから、下人たちを呼んで、

「決して他言してはならぬぞ。」

と、くれぐれも注意するよう厳命した。また、春風の妻には、

「宴会が終わったら参るように。」

と言ひ渡し、名前を「金ヤンプ<sup>87</sup>」とお付けになった。春風の妻は、伏して監司に百拝謝礼した。三日後、会計裨将が召し出されると、他の裨将たちはこそこそうわさ話をしていた。

「なかなかの男前だ、会計裨将は。どこの馬の骨かは知らないが、それに髭の生えてないのが気に食わないが、なかなかの人物だ。ほめない者がいないくらいだ。」

と。この日、天気は快晴、裨将らは三<sup>ていしょうなもてなし</sup>吐<sup>88</sup>にあずかって京城を出発して行っただが、その行列はおごそかで威厳があった。進み行く白馬の背には、双轎や、独轎などを載せ、その左右に駿馬がつき意気揚々と行進するとき、前陪、随陪、冊房、裨将が、身だしなみを整えて列をなし、銀の鞍つけた白馬の背に虎皮を敷きその上に高くまたがり、瀟湘斑竹で作った鎖金扇で日光をさえぎりながら平壤へと向かうさまは、まことに壮観な眺めであった。吏房、こせきがかり はんざいがかり ずいこうにん ざつようにん かのげぼく こまづかい 戸房、刑房、随陪、通引、官奴、使令、ぐんのげぼく ざいにんがかり 軍奴、羅将らが旗を持ち、「そこのけ、監司のお通りだ」と先払いする声や、馬に掛ける声もにぎやかであった。

ナムデムン ヨンソムン ム  
南大門を通り過ぎ、延韶門をいそぎ過ぎ、舞

ハクとうげ ホンジェウオン みね  
鶴峴を越え、弘濟院を前に見て、小さな緑峰、大きな緑峰を過ぎ行く。思えば、目にした景色はすべて第一の景色である。此処は、〈壬戌の七月既望夜<sup>89</sup>〉に、蘇子瞻が船遊びをした赤壁であろうか。〈無限景<sup>90</sup>〉とは、このことだ。水波静かで、月光はさわやかである。中和邑で一泊し、ヨンゲ部落に達すると、すでにぐんのしょうこう やくしょのやくにん 営本官属や六房官属が待機していた。新旧官吏の交代があった後、赴任先に入っていく。

軍の哨官<sup>しょうたいちよう</sup>が先頭となり、前陪裨将<sup>せんとう</sup>、後陪裨将<sup>こうほう</sup>、執事、諸長官が整然と隊列を組んで進み、千摠・把摠<sup>ちようちよう</sup>などが軍門の両側に待ち受ける中を進む。その時、大将旗や清道旗が各両側にならび、道案内役の羅将が立ちならび、東西南北に黄・白・青・紅色の旗がぎっしりとにぎやかに並べられていた。刑房に謁見<sup>92</sup>するとき、太鼓や長鼓や笛や奚琴などの六角の音があたりの山野をふるわし、馬に掛ける声や先払いする声もにぎやかであるのに、さらに吹打声<sup>らっぱのおと</sup>が鳴り響く。

きれいな所の美色<sup>きーせん</sup>たちは、丹粧して着飾り、前後左右にならんで「万歳、チファジャ」と目出たい声を空に響かせている。

前陪裨将の挙動をご覧あれ。元気よく歩む白馬の背にふんぞりかえって乗り、足に紅紬・瑛紬の乗馬用足覆いをぐるぐる巻き、(不明)<sup>93</sup>厚手の唐衣をつかんで肩に掛け、格好よく中に入る。長林をぬけて大同江の岸边にいたると、緑水清江(不明)<sup>94</sup>には赤壁江での大戦時、龐統<sup>95</sup>の連環驚計<sup>96</sup>により船で陸地を作ったのと同じように、船がたくさん集まっていた。

いそぎ乗って渡り、大同門より入城するとき、前後左右に見物人は押すな押すなの人ばかりであった。布政楼の前をいそぎ過ぎ、鍾路の通りを過ぎ、客舎に謁見して、大同門より入

城するとき、馬を急がせて宣化堂<sup>97</sup>に入り、席に着いて大砲手<sup>しゅくほうさんばつ</sup>を呼び、放砲三声をあげさせる。すると、各房官属や帶率軍官らが次々とあいさつに来て、お茶を飲んだかと思うと、今度は百余名もの妓生がやってきて一人ずつあいさつする。それが終わって、監司は、冊房<sup>ちようかん</sup>裨將、各房裨將に警戒にぬかりがないよう命じたのち、会計裨將を呼び、冗談を言ってからかわれる。

「会計裨將は、奇特にもいまだ独り者だということだが、美人の多い平壤に来てまで<sup>ひとりね</sup>独宿空房することはないぞ。今夜、ひとつどうじゃ。」

と、会計裨將は、それにお答えして、  
「小人は、浮気はしないと妻と固く約束して四五年経ちましたので、色にはとんと関心がなくなりました。」

と申し上げる。会計裨將の言葉の真意を知る者は監司のほかにはないので、監司は、

「若いのに一人で過ごせば体に悪いというから、くれぐれも気をつけるがよからう。」  
と、言い添えた。

会計裨將は、その後も道理に外れることがなく、すべてにおいて誠心誠意行ったので、監司はますます会計裨將を可愛がられた。そうして、数ヶ月のちには、数万両の賞金が与えられることとなり、みんなをうらやましがらせた。

他方、会計裨將は、春風の様子を人に探らせていた。裨將は、ある日、監司が宿舎に帰った後で秋月の家に向かった。入り口で春風のさまを見ると、あまりの変わりように急には見ても信じられないほどであった。

<sup>よもぎのようにみだれ</sup>頭髮は蓬頭<sup>よもぎ</sup>乱髪でもじゃもじゃで、顔は洗っていないので垢だらけで汚ならしく、十年も洗っていない古着<sup>ぼろ</sup>にあちこちつぎをあて、縄でしばって着ていた。この者を人が見たら、誰しもその

あまりの醜さに唾を吐きかけたはずである。春風は、夢にも裨將が妻だと知らなかったが、裨將が知らないはずはない。

怒りをこらえて秋月の部屋に行くと、ずるがしこい秋月は、会計裨將を見てカモが来たと大いに喜んだ。そして、旅の疲れをねぎらうふりをしながらお色気たつぷりに酒を勧め、特別<sup>ごうかなしよくじ</sup>ごしらの茶啖床を出して厚くもてなすのであった。だが、裨將は飲むふりをして少しだけ飲み、乞食のような小間使いの春風に、茶啖床<sup>ごうかなしよくじ</sup>をそっくりそのまま下げて<sup>98</sup>やった。そして、

「可哀想な奴じゃのう、おまえは。ところで、元からおまえは乞食だったのか？ また、どうしてそんな姿をしておるのじゃ？」  
と聞いた。春風は、地に頭をすりつけて、

「実は、<sup>わたしめ みやこ</sup>小人も京城の者でございまして、こんな姿になりましたにつきましては事情がございしますが今は詳しくは申し上げられません。このように、旦那様が召し上がられました茶啖床<sup>ごうかなせん</sup>を小人ごとき卑しき者にお下げくださいまして、この恩は泰山のごときものでございまして。感謝しても感謝しきれません。」

と言って、感激するのであった。裨將は微笑して宿舎に帰り、数日後、使令に命じて春風を引捕らえさせ、むち打ち台<sup>99</sup>に据えて、

「こやつ、よく聞け。おまえが春風か。そ<sup>おかみのかね</sup>ちは、畏れ多くも国<sup>ホ</sup>錢である戸曹<sup>ジョ</sup>の錢を高利で借り受け、商いをするとて平壤に行き、四、五年にもなるのにいまだ一錢も返納せざるは何事か。戸曹より公文書を発し、“そちを捕らえて始末せよ”とのご命令である。そちは死罪をあまんじて受けよ。」

と言って、使令に、

「手加減してはならぬ、思いきり打て。」  
と命令した。使令は、笞を手にとって十余回

こっぴどく打ちすえる。すると、春風の弱々し  
 そうな足の方々から皮膚が裂け、血がほとばし  
 り出た。裨将はもっと打たせたかったが、血の  
 飛び散るのを見てたまりかね、「これ以上、と  
 もできない」とひとりごち、使令に、

「打つのをやめよ。これ、春風、よく聞  
 け。そちは、大金をいったいどこに使ったの  
 じゃ、話してみよ。閹<sup>ばくち</sup>賤<sup>す</sup>をや<sup>さ</sup>って失<sup>す</sup>ったの  
 か。酒色<sup>さけとおんな</sup>に明け暮れたのか。どこに使ったか、  
 正直に申せ。」

と言うと、春風は泣きながら、むち打ち台に伏  
 せていた顔を上げ、

「小人<sup>わかしめ おかみ</sup>は戸曹<sup>チュウウォル</sup>から金を借りて平壤にやっ  
 来、いまの主人である秋月と一年近く大いに  
 遊びまして金を使い果たし、このざまとなっ  
 たわけでございます。生かそうが殺そうが、  
 どうぞ裨将さまのお思いのままになさって下  
 さいませ。」

と言うのであった。裨将は、前々から仇のよう  
 に思っていた〈秋月〉の名が春風の口から飛び  
 出して来たので、憎いとばかり歯ぎしりし、使  
 令に声を荒げて、

「そちはすぐに行って、秋月を捕らえてま  
 いれ。大急ぎで行ってまいれ。少しでも遅れ  
 てもしたら、重罪を申しつけるぞ。」

と、厳命したので、ただちに出かけて行き、秋  
 月の首根っこを捕らえて帰ってくる。

それを見た裨将は、使令に、  
 「むち打ち台に縛りつけ、別<sup>とくべつ</sup>答杖<sup>かたいむち</sup>を選ん  
 で、遠慮容赦なく打て。もし手加減などしよ  
 うものなら、命はないものと思え。」

と厳命した。一度<sup>ひとたび</sup>打って様子を見、二度<sup>ふたたび</sup>打って  
 様子を見、むち打つたびに数を記し、十余度<sup>たび</sup>  
 打ったのち、

「これ、女、早く白状しないか。」

と、猛々しい声を発し、

「そちの罪は、そちが自分でよく知ってお  
 るであろう。」

と言うと、秋月、伏せていた顔をやおら上げ、  
 「春風<sup>かね</sup>の銭<sup>かね</sup>がどのような銭<sup>わたし</sup>か、小女はまっ  
 たく知りませんでした。」

と、消え入るような声で言うのであった。これ  
 を聞いた裨将は、むかつ腹を立て、

「汝<sup>なんじのかきにつのを</sup> 牆<sup>かき</sup> 折角<sup>を</sup>」<sup>101</sup>ということわざを、そち  
 は知っておるか。畏れ多い戸曹<sup>おかみ</sup>の銭<sup>かね</sup>を、そち  
 の代わりに営門<sup>やくしよ</sup>が弁償してくれたり、あるい  
 は本官が弁償するとでも思っておるのか。さ  
 もなければ、百姓<sup>たみひやくしよ</sup>から巻き上げろと言いた  
 いのか。ここにおよんで、何をほざいてお  
 る。」

と怒鳴りつける。

軍奴らが両の目をかっ<sup>と</sup>見開き、答を高く挙  
 げ、青天の霹靂のごとく万疊青山に轟きわたる  
 ような声で叫んだ。

「此奴<sup>こやつ</sup>、まだ嘘をつくか。覚悟しろ。」

と言うや、朱杖<sup>あかいこんぼう</sup>を打ち下ろした。五十回たた  
 いてから、

「これでも、まだ白状せぬか。」

と、怒鳴りつけた。秋月は今やものも言えず、  
 三魂七魄<sup>たましい</sup>をなくして、目を白黒させ死の恐怖に  
 おののいていた。そして、ついに、

「国<sup>おかみ</sup>の掟<sup>やくしよ</sup>も厳しく、官<sup>ごめい</sup> 命<sup>い</sup>も厳しく、  
 裨将様<sup>だんな</sup>のご命令も厳しゅうございますので、  
 春風<sup>かね</sup>から受け取りましたお銭<sup>わたしめ</sup>は、小女<sup>みづか</sup>がご命  
 令通りすべてお返し致します。どうかお許し  
 下さい。」

と哀願するのであった。これを聞いた、裨将は、

「戸曹より公文書を発し、“そちを捕らえ  
 て始末せよ”との命令であったが、自ら己の  
 罪を悔い、“ご命令通りすべてお返し致しま

す”と申したゆえ、そちを助けてやることにする。ただし、戸曹から借りた錢の利子があるので、全部で五千両、耳をそろえて差し出せ。」

と、申しつけた。秋月は、

「十日の猶予をいただけますなら、そのように致します。」

と申し上げ、覚え書きを書いた。こうして、ようやく春風と秋月は、縄を解かれてむち打ち台より下ろされた。そして、裨將は、春風に、

「そちは十日以内に、必ず、返してもらったものを持って上京せよ。予は、退っ引きならぬ用があるので先に都に帰ることにするが、そちは上京したなら直ちに我が家に挨拶にまいれ。」

と、申しつけた。

春風はこれを開き、感謝感激して、  
「<sup>だんな</sup>裨將様のおかげで、<sup>おかみ</sup>戸曹から借りた<sup>かね</sup>錢を取り戻すことができました。」

と、感謝するのであった。

裨將は、ただちに監司を訪ねて、二人を取り調べた結果を詳細に報告した。そして、やや声を落として監司に、

「そういう訳でございますので、明日、おいとまごいをして<sup>みやこ</sup>京城に発たせていただければと思っております。また、おかげさまで、利子を含めて五千両を秋月が返すとの約束を致しました。これにつきまして、お願いがございます。この錢をどうか春風に返していただけないものかと思っております。もとはと言え<sup>おかみ</sup>春風が<sup>かね</sup>戸曹からお借りしたお錢でございますので、本人に返させたいと思っております。どうかそのようにお計らいくださいますよう、切にお願い申し上げます。」

と懇願して、監司より許可を得た。翌日、監司

のもとを辞し、これまでもらった賞金数万両も為替にして、平壤を経て<sup>みやこ</sup>京城に到着した。到着するとただちに為替を現金に換え、ひたすら春風の帰りを家で待った。

平壤では、監司が役人に命じて、秋月に、「早く錢を出せ、さもなければ引っ捕らえるぞ」と言って責め立てさせると、秋月は十日も経たないうちに五千両すべてを差し出した。春風はその<sup>みやこ</sup>錢を受け取り、すぐさま京城へと帰って来たのであった。

そのとき、春風の妻は門の外にまで出て出迎え、春風の袖を喜んでつかみ、

「どうしてこんなに帰りが遅くなられたのですか。商売の方は、うまく行きましたか。」と、聞いたが、それには答えず、春風は懐かしそうに、

「予の留守のあいだ、みな達者であったか。」

と声をかけた。そして、十二箱にわけて馬に積んで来た<sup>かね</sup>錢を、商売して儲けたものだと言って見せ、しきりに息巻いた。そして、家に入ると、春風の妻が春風のために準備しておいた<sup>ごうかなしよくじ</sup>茶啖床を出した。これを食べた春風の言いぐさがおもしろい。「これは不味いな」と眉をしかめて見せたり、「これは美味い」と舌鼓を打ったりしていたが、急に箸を飯に突き刺して、

「<sup>きじにく</sup>生雉の足はよく焼けてないし、焼き魚は油が足りないので焦げているし、美味いという牛肉だってこの程度か。平壤のは美味かったなあ。<sup>おかみ</sup>戸曹から借りた<sup>かね</sup>錢を返す必要さえなかったら、帰るのではなかった。明日、錢を返して平壤に帰ろうと思うが、そちも予と一緒に平壤に行<sup>ピョンヤンのやくしよ</sup>って平壤監營内にある<sup>わがや</sup>小家の食事を食べてみないか。」

と、いけしゃあしゃあと言う。あまりの傲慢な

春風の態度に耐えかねた春風の妻は、ひとつ懲らしめてやろうと、日が暮れるのを待って着ていたものを脱ぎ、また裨將<sup>なり</sup>の服装をしてゆっくりと部屋に入っていった。それを見た春風は、しきりに目をこすって半信半疑のようすであった。

裨將は、声高に春風を怒鳴りつけた。

「お前は、平壤でのことをもう忘れたか。自分の家に帰って来たからといって、すべてが終わったわけじゃないぞ。」

その聞き覚えのある声に、仔細に相手を見ると、はたせるかな平壤で錢を取り戻してくれたあの会計裨將であった。心底魂消て、部屋から庭に飛び降り、頭を地にこすりつけて挨拶すると、会計裨將は、

「平壤でぶたれた笞<sup>ちけい</sup>刑は、さぞかし痛かったであろうな。」

と言った。春風は、それに答えて、

「痛いなんて、とんでもございません。  
小人<sup>わたしめ</sup>には、ありがたい笞<sup>ち</sup>でございました。」

と言った。会計裨將が、

「ところで、そちが平壤を発つ前に、錢を馬<sup>ソウル</sup>にて運び都に着いたら我が邸宅<sup>や</sup>を訪ねてまいれと厳命したのに、どうしたのじゃ。余は、毎日そちの帰り来るのを今か今かと待っていたのだぞ。たまたま、今日、所用があつて、南山下の朴承旨<sup>ナムサン</sup>の宅<sup>いえ</sup>に行つて大いに酒を飲み、うわさでそちが帰つたと聞き早速やつて来たというわけじゃ。急いで来たので腹が減<sup>はくまいがゆ</sup>った、白米粥でも喰わせろ。」

と言う。春風はわかりましたと答えて、すぐさま妻をあちこち探した。しかし、いくら探しても見つからない。それでやむなく、自分で粥を炊くことにし、米を取り出して台所で研いでいると、裨將が見て、

「そちの妻はどうした？ お前は、自分でのことも外のことも皆一人ですのか。」

と、いやみたっぷりのことを言う。春風は、黙して米を研いだ。だが、内心では、

「久しぶりに会ったのだから、二人で今夜は仲良く寝ようじゃないかと言っておいたのに、どこへ行ったのだ。」

と怒っていた。裨將があれこれ大声で怒鳴りつけるので情けなかったが、がまんするしなかった。会計裨將は、春風が粥を炊いているのを盗み見て吹き出しそうになったが、ぐっとがまんした。

しばらくすると粥の膳をもって来た。別に食べたくなかったが、裨將は少し食べるふりをして膳を春風に下げてやりつつ、

「そちは、平壤で秋月<sup>チュウウォル</sup>の家の使喚<sup>こまづかい</sup>をしていたとき、欠けた碗に残飯をもらいそれに汁をかけ、サジもなしに土間で食べていたときのことを思い出しながら、食べるがよい。」

と言った。春風は、もしや妻が聞きはしなかったかと気も動転して、目をきよろきよろさせ急ぎ食べるのであった。このさまを見ていた春風の妻は、

「これを見て、だれが笑わないでいられましょうか。こんなことを主人<sup>おっと</sup>もしていたら、誰も人扱いしてくれないでしょう。それはそうと、人をだますのがこんなに面白いとは知らなかったわ。自分だけで楽しんでは申し訳ない。」

と、心で思っていた。このあと、さらにあれこれ命じた後、会計裨將はしばし席を外して男装していた服を脱ぎ、今度は女の服に着替えてやって来、にこやかな顔をして、春風に、

「この、大馬鹿野郎！」

と罵倒し、

「あんたは、ほんとうに鈍いんだから。」

と言うと、春風はあきれてものも言えず、しばらくぼかんとしていた。やがて笑いながら、春風は、

「前から気づいてはいたが、わざと知らないふりをしてやったんだ。」

と、減らず口をたたいた。その夜は、二人してえんおうのしとねにまくら 鴛鴦衾枕してすごし、夫婦は再びかつての情を取り戻したのであった。

翌朝、二人は起きて、戸曹おかみから借りたかね 錢をすべて精算した。そして、春風の妻がもらった賞与数万両で奴婢や田畑などを買い入れ、その後は着るもの、食べるものに何不自由なく暮らし、子どもにもたくさん恵まれた。また、春風は前非を悔い改め、その後は決して博打や女遊びをしなかったため、二人はいついつまでも仲良く暮らしたということである。

思うに、女の身でありながら自ら男装して会計裨将となって平壤に行き、秋月も懲らしめ、春風のような主人ていしゅも連れ戻し、戸曹おかみから借りたかね 錢まですべて返し、夫婦二人していつまでも仲良く暮らしたというのは実にめずらしいことである。ここにそのおおよそ書き記して、後世に伝えようと思う。もしあなたが女性であるなら、これをぜひ読んで参考にされたい。

## 注

- 1) 朝鮮第19代国王（1661－1720。在位1674－1720）。競争がもっとも激化した時期であったが、対外的には戦争がなく比較的平和な時代であった。張嬪を寵愛したことで有名。
- 2) 「撃壤歌」は、堯の世に、ある老人が太平を楽しんで歌ったという歌。『十八史略』に「老人有り、甯を含み腹を鼓うち、壤を撃って歌うて曰く、『日出でて作し、日入って息ふ。井を鑿って飲み、田を耕して食ふ。帝力何ぞ我に有らんや』と」。
- 3) 「春塘台」はソウルの昌慶宮内にあり、王室に祝い事があったり儒生を選抜する必要が生じたとき、王の臨席のもとここで不定期に科挙試験が行われた。
- 4) 「麴」とは酒麴のこと。酒を飲めば酒が売れる、酒が売れば麴が売れる。
- 5) 李白のこと。杜甫「飲中八仙歌」に、「李白一斗詩百篇 長安市上酒家眠」とある。
- 6) 「鸚鵡杯」は、オームのくちばしのような形をした螺鈿細工の杯。
- 7) 「元斗杓」は、朝鮮中期の文人。光海君を退けて仁祖を擁立した功により靖社功臣となり、李适の乱を平定して全州府尹になる。後年、右議政、左議政（左大臣）にまで昇る。
- 8) 「戸曹」は、高麗・朝鮮時代の行政機関の一つで今日の日本の「～省」に該当。戸籍、税金、食糧、貨幣など、経済に関する業務をつかさどった。
- 9) 「平壤」は、朝鮮時代第2の都市。妓生の本場として有名で、妓生養成所があった。
- 10) 李白「将進酒」の一節。詩の一節だが、「古書」と聖賢の書のように権威づけをしている。
- 11) 原文「연유문」だが、不明なので金起東訳に従った。
- 12) 『十八史略』巻一太古に、開闢時「天皇氏は木徳を以て王たり」とある。五行とは木・火・土・金・水で、天皇氏を木の徳に配したのは五行相生説で「木」が初めだからである。
- 13) 「扶桑」は、「東海の日が出る所にあるという神木」（『山海経』）。
- 14) 「陽木」は、春・夏に繁茂する木。桐の類。この項、意味不詳。
- 15) 李白「梁園吟」の一節、「荒城虚照碧山月 古木尽入蒼梧雲」を变形したもの。
- 16) 『三国志』「三顧草廬」。劉備が諸葛孔明の草堂を訪ねたとき、昼寝を理由に拒絶する場面。これは絵にも描かれ、朝鮮時代中期の鄭嬭に「草堂春睡」がある。

- それによれば諸葛公明が眠る草堂を巨木が覆っている。
- 17) 李白「把酒問月」の一節。
- 18) 劉兼「貽諸学童」の一節にあるが、この詩を踏まえているかは不明。
- 19) 九月山にある景勝地で、朝鮮十景の一つといわれる。
- 20) 全長439kmで、朝鮮で5番目に長い川。普通江との合流点に平壤市がある。
- 21) 平壤の中央部を流れる大洞江の北岸にある丘。海拔96m。峰が牡丹のようなのでこの名前がついた。この峰の下に絶壁に「浮碧楼」がある。
- 22) 平壤城内城の東門。かつては北朝鮮国宝第一号。石築の上に二層の楼閣がある朝鮮時代中期の城門。
- 23) 「普通門」は、6世紀半ばの高句麗時代に作られた城門。花崗岩を積み上げた築台の上に建てられた二層の門楼からなる。現在のものは1473年に新築された。
- 24) 平壤の錦繡山（高さ95m）にあった高句麗時代創建と伝えられる寺。日清戦争で大きな被害を受け再建されたが、朝鮮戦争で焼失。平壤が一望できる平壤八景の一。
- 25) 原文「시구문」だが、城内の水を川に流した「구문（水口門）」であろう。平壤城の城壁南側に今も水口門の跡があるという。
- 26) 「江南」は中国揚子江以南の意であるが、一般的には揚子江下流域を指す。隋唐時代以降に生産力を高め、仏教寺院が多く造られ文人が輩出し、経済とともに文化の中心地であった。小江南は、これになぞらえたもの。
- 27) パンソリで、せりふから唱に移るときの決まり文句。この小説がパンソリと関係することを示す。
- 28) 一般的に監營（監司の庁舎）の正門を「布政門」と呼んだようであるが、江原道監營では「布政楼」の額がかかっている。平壤監營の正門名は「布政門」。
- 29) 「二八（にはち）」は、二×八で十六才のこと。
- 30) 「卓文君」は、富豪卓王孫の娘で、相如がたまたま王孫の家に至り琴が縁となって出奔して相如のもとに走る。酒屋を開くなどして、辛苦を共にする。
- 31) 前掲注3)
- 32) 「董仲舒」は中国前漢中期の代表的儒学者。「策文」とは、官吏採用試験で出題された経義や政治に関する事柄について回答したもの。
- 33) 「諸葛亮」は諸葛孔明のこと。劉備から「三顧の礼」をもって迎えられた。「出師表」は、主上に軍隊を出すことを申し上げるの意。千古の名文とされ、これを読んで泣かない者は人にあらずとまでいわれた。
- 34) 北宋の蘇軾の名文。黄州に流されたとき、赤壁に舟遊びをして三国の英雄をしのび、憂いを忘れたというもの。
- 35) 李白の七言古詩。青楼という場所を考えるなら、壁の書はこの詩の一節「百年三万六千日 一日須傾三百杯」だったか。または、風流な「清風朗月不用一錢買 玉山自倒非人推」だったか。
- 36) 「血枕」は血流のよい枕で、「安枕」は安眠できる枕か。不詳。
- 37) 原文「인물상귀비개머」。
- 38) 「八両紬」は中国産の絹織物の一種で、他の絹織物より重くて丈夫。「両」は重さの単位。
- 39) 股下が幅の広いズボンのような女性下着の一種。肌着の上に着る下着。
- 40) 中国産の麻でつくった装飾品の一種といわれる。
- 41) 原文「애빅」。
- 42) 平安南道、平壤の東方にある地名。品質のいいタバコがとれることで有名。
- 43) 王勃「臨高台」の一節。
- 44) 『南原古詞』に2回出てくるなど、古典小説に多用されている。
- 45) 「柏梁台」は漢の武帝が建てた楼台。梁に香柏材を使用したことから名前が付けられた。「銅雀台」は

- 魏の曹操が建てた楼台、上に銅の雀が飾ってあった。曹操は死ぬとき、自分が死んだらいつもこの台で自分を祀り、月の一日と十五日には宮女に歌舞をさせよと遺命したが、すでに唐の時代には灰燼に帰していた。
- 46) 紫草の根を入れ蜂蜜をまぜて濾した赤い色の焼酎。
- 47) 前掲注23)。
- 48) 李白「登金陵鳳凰臺」の「二水中分白鷺州」を踏まえたと思われる。
- 49) 李白の詩「峨眉山月歌」の起句「峨眉山月半輪秋」を變形したもの。
- 50) 李白の詩「子夜呉歌」の冒頭句。
- 51) 原文「병호심사수류월」。李白「陪侍郎叔遊洞庭醉後 三首之三」の承句「平鋪湘水流」に〈月〉を加えたか。その理由として「三首之二」の「湖心泛月歸」が上げられる。
- 52) 郎士元「塞下曲」の最終句。
- 53) 盧照鄰「長安古意」の一節。
- 54) 「春風」と「秋月」それぞれの前に「장」があるが意味不明。
- 55) 〈風月〉の風は「春風」、月は「秋月」を意味。さらに、風流の意の「風月」を含意する。
- 56) 「灘水」は、安徽省北部にある「灘河」か。「西北風」との関連は不詳。
- 57) 曹操と孫權・劉備の連合軍が揚子江中流の赤壁で戦った時、諸葛孔明が東南の風を祈りそのおかげで大勝した。
- 58) 張籍「秋思」の起句「洛陽城裡見秋風」を踏まえたもの。
- 59) 杜甫「洗兵馬」の一節。
- 60) 最初の「白」と最後の「風」が原文漢字。カタカナ部分はハングル「학제충일라」、意味漢字不明。
- 61) 『全唐詩』に「楊柳垂糸」2例、「滿江風」3例あるが、出典不詳。
- 62) 杜甫「吹笛」の一節「吹笛秋山風月清」の變形か。
- 63) 「諸風」「和風」は、原文「제風」「와風」。ハングル部分の漢字、不詳。
- 64) 原文は「금생일건풍」。仮に漢字を当てた。
- 65) 春は「春風」、秋は「秋月」を意味。また、「春秋」は「久しい年月」を含意。
- 66) 「緋緞」の原文は「돈사단」、「繭紬」の原文は「가겨쥬」、「長紋紬」の原文は「장문쥬」。不詳。次の「短紋紬」も。
- 67) 「八両紬」、前掲注33)
- 68) 朝鮮では「藿」に〈わかめ〉の意がある。
- 69) 「梅花打令」は、朝鮮時代後期に流行した十二歌詞の一つで梅花歌とも。桃の花の季節にあわせて愛を求める、若い男女の心情を歌ったもの。
- 70) その人の生まれた年・月・日・時間（四柱）を干支であらわした8字のこと。これにより人の一生の運命が決まると考えられていた。
- 71) 「金承旨」の「金」は姓で、「承旨」は承政院に属し王命の出し入れを担当した官職で正三品の堂上官。
- 72) 「弘文館」は、王宮の書物を管理し文書処理を行い、王の諮問に応えた官庁。
- 73) 「都承旨」、「都」は〈中心〉の意、承旨の頭。承政院の6承旨の中の筆頭。
- 74) 「監司」は、觀察使の別称。各道の長官。
- 75) 「茶啖」は、お客をもてなすために出すお菓子のことであったが、これがだんだん「お客をもてなし」意に変化して、「床（お膳）」が付くと「お客をもてなす豪華な膳」の意になったようだ。ちなみに、お菓子の膳は「茶菓床」という。
- 76) 「裨將」は、朝鮮時代に監司や府使などの地方長官に随行した幕僚格の武官。
- 77) 「網巾」は、まげを結うときに頭髮が乱れないように頭に鉢巻きのように巻きつける馬の尾の毛で作った網目状の帯。
- 78) 「貫子」は、網巾を額に巻きつけるための紐を通す小さな環。玉・金・銀・角・骨などで作り、その材料や

環の大きさによって階級を表わした。

79) 「宕巾」は、役人が網巾の上にかぶる髪形を整えるための冠の一種。家ではこれをかぶったまま生活し、外出するときにはこの上に冠をかぶった。

80) 「唐鞋に鉾を打って」、不詳。

81) 「亢羅」は、絹や麻や木綿糸で織った布地の一種。横糸の布目を三、四本とばして無数の穴が空くようにしてあるので、夏用に適している。

82) 「麾衣」は、役人が日常着ていた上着。袖が長く両脇が開いている。

83) 「テウイテギ」は原文「뒤태기」。服の一種と考えられるが、詳細不明。

84) 「将牌」は、身分を証明するもので将校や裨将が腰に下げていた木製の札。

85) 「瀟湘斑竹」は斑竹である。湘妃竹とも。斑になっている理由を瀟湘と関連づけた次のような伝説がある。堯王の二人の娘（娥皇と女英）は舜と結婚したが、舜が蒼梧山で死ぬとそれを嘆いて二人とも湘江に身を投げて死んだ。このとき、二人の流した涙で湘江付近の竹がまだらになった（張華『博物志』巻八「史補」）。

86) 「内堂」は、アンパンとも言い女性専用の部屋。そのため、幼児や主人をのぞく男性の出入りは厳しく禁じられていた。

87) 「ヤンプ」は原本がハングルであるため不明であるが、働かない亭主（夫）の李春風を養う（食わせる）者という意味で漢字「養夫」を当てたか。この名前は張徳順本にはない。

88) 「三吐」は「一飯三吐哺」（史記・魯周公世家）より出た語。食事中でも三回（訪問者があるたびに）食べていたものを吐き出して、すぐに客を迎えること。賢者を招き迎えるのに熱心なことをいう。

89) 蘇軾「赤壁賦」の冒頭「壬戌之秋七月既望」を踏まえている。

90) 「無限景」は、杜甫「春日江村 五首之二」にある。

他に、韓国古典小説『三説記』にも。

91) 「千摠」は軍営所属の正三品武官。「把摠」は大隊規模の指揮官。

92) 監司が身分の低い「刑房に謁見」というのはおかしいので、ここに王の肖像か何かが祠られていた可能性はある。下の「客舎に謁見」も同様であろう。

93) 不明部分の原文は「발길사」。

94) 不明部分の原文は「죽여슈」。

95) 「龐統」は、三国時代に劉備に仕えた人物。諸葛孔明とともに「伏龍鳳雛」と並び称せられた。

96) 「連環驚計」は、三国時代に呉の周瑜が魏の曹操の軍勢を火攻めにするため龐統を送り、曹操みずから軍艦を鎖で連結させ大勝利した故事による。

97) 朝鮮時代、各道の監司（＝觀察使）が政務をとっていた正堂。

98) 朝鮮では、食事をしたり（パップ〔飯〕床）、菓子を食べたり（茶菓床）、酒を飲んだり（酒案床）する時、場所の移動はなくそれぞれに応じた「床（机、お膳の総称）」が運ばれて来る。また、下の者はいかなるお祝いの時などには、上の者が食べたあとでそれが下される。そのため、客が料理を食べきることではなく、また食べきれような半端な量ではない。

99) 高さ50cmほどで、幅30cmほどの板をタテ2 m50cm横2 m弱の十字型に組み合わせた台。その上に腹這いになり、両手を横に広げ両足をそろえた状態で縛りつけられて答打たれる。

100) 細長い厚紙に人物・鳥獸・虫・魚・文字・詩句などが書かれた60枚から80枚が一組になるカード。花札に似たものか。

101) 自分の手綱さばきが悪くて牛が牆に角をぶつけて折ったにもかかわらず、ここに牆がなかったら牛が角を折ることもなかったと相手に責任転嫁すること。